

経営談話室

(Vol.103)

千葉県美浜区新港のスケートリンク「アクアリンクちば」近くに拠点を構えるアイスホッケー専門の輸入卸を営む株式会社ベスト。

トップブランド「シャーウッド」の輸入・販売元として世界中の選手やファンにも知られています。

アイスホッケー筋に歩んできた米本照義社長に、アイスホッケーへの思いと創業から今日までの道のりなどについて伺います。

県内のアイスホッケーの普及と強化 「裾野を広げていきたい」

株式会社 ベスト 代表取締役

米本 照義

よねもと・てるよし

1938(昭和13)年、北海道苫小牧市生まれ。苫小牧市立苫小牧東高校卒。苫小牧市内、木材問屋であり、木材工場を有する(株)岩倉組に勤務。その後、東京の関連会社へ転勤。当時まで岩倉組は、アイスホッケーチームを実業団チームとして保有し、ホッケー界に貢献。その必要関連商品の輸入など、自賄いの業務担当。その後退社し、当時の業務経験を生かして独立。現在に至る。

所在地:千葉県美浜区新港219-8 2F

事業内容:アイスホッケースポーツ用具、用品、その他関連用品の輸入卸販売



「シャーウッド」というブランドに惚れこみ 「日本で紹介したい」と強く思った

弊社は、アイスホッケー用スティックなどのトップブランドであるカナダのメーカー「シャーウッド」の製品をはじめとする、アイスホッケー用品の世界の有名ブランド商品を取り扱う商社です。

私は、北海道苫小牧市に本社を持つ材木卸問屋の岩倉組に14年弱勤めていました。岩倉組は、実業団チームを持っていた関係で、「シャーウッド」からアイスホッケーのスティックなどを輸入していました。当時その輸入業務を私が担当していたのです。

「シャーウッド」というブランドに惚れこみ、「日本で紹介したい」と強く思ったのがきっかけで、退職後すぐに、総

代理店の許可をもらうためにシャーウッドの本社を訪ね、輸入業務をそのまま引き継ぐ形で、昭和53年に「シャーウッド」の総代理店として独立したのです。

7年後の昭和60年に株式会社に組織変更し、現在はアイスホッケー用品全般を扱い、全国約30の小売店や問屋に卸しています。



支社や関連会社での生活が長く、花見川区に自宅があったからという理由からなのです。

世界的なブランドを 千葉から発信

弊社がなぜ、数あるスポーツ用品の中でもアイスホッケー用品に特化したのか、それは、私自身が苫小牧市に生まれ育ったというのが大きいのだと思います。北海道では苫小牧市、釧路市でアイスホッケーが特にさかんな土地で、私も幼い頃からアイスホッケーに親しんできました。実業団チームの選手ではありませんでしたが、毎年冬に行われる会社内の職場対抗戦でプレーしたものです。ですから、ホッケー業界に携わっていくというのは私にとって自然な流れだったのです。

5年前に「アクアリンクちば」がオープンしたのに合わせて、本社、店舗ともに美浜区の現在地に移転しました。会社をアイスホッケーにあまり縁のない千葉に置いたのは不思議に思われるでしょう。実は、岩倉組時代に東京

信用と実績を培った長野五輪

当初は、妻と息子（現常務、明氏）を中心とした家族経営のような営業形態でした。そんな小さな会社が、カナダの世界的なトップメーカーと交渉して販売権を手に入れたわけですから様々なことがありました。

株式会社としてスタートした翌年の1998年に長野オリンピックが開かれた際は、長野五輪の公式ロゴが印刷されたオフィシャル販売商品を、日本オリンピック委員会（JOC）より許可を得て、シャーウッド社と共同で開発しました。

JOCから長野オリンピック会場での商品販売ライセンスを取得する際に、常務が一苦労しましたが、その商品をカナダから輸入、会場に納入するまでにも、これまた大変な苦労がありました。

米本さん「Q&A」

Q1 1日の平均的なスケジュールは？

午前11時より夜7:30まで、営業、業務作業。

Q2 よく読む新聞&雑誌は？

読売新聞。また、思想などの書籍。

Q3 仕事以外でハマっていることは？

特に無し。

Q4 座右の銘（好きな言葉）は？

誠意、誠実。

Q5 とっておきのストレス解消法は？

1日の疲れを癒してくれるアルコールを少々。

Q6 「やる気の源」をひと言でいうと？

仕事に対し、家族と子ども達、孫達のことや、他人を慮ってがんばる事。



「辻本有悟さん」は、アイスホッケー関東大学リーグの1部リーグ、法政大学のデフェンスで、先発メンバーとして大活躍してきた名選手。明常務とは長い交友関係にあります。

今後の課題としてはアイスホッケーという競技の普及と強化です

いよいよ時がきて、カナダでの製品生産が終りに近づいた時、シャーウッド社が所在のケベック州で雪害による大停電が発生したのです。それを乗り越え、ようやく航空便で日本到着。社員一同、知人、友人から最大限の応援を得て、さらに常務のすばらしい知恵をフルに生かし、総力戦で長野オリンピック開催の1日前に、きっちりと会場に納入しました。ベストという小さな会社には、まさに「映画のような劇的な出来事」ほどの貴重な経験をしました。

長野オリンピックが終わり、まもなくJOCから表彰状をいただきました。

醍醐味はスピード感

アイスホッケーの魅力を一こと言い表すのは難しいですが、氷に乗ると自分の持っているもの以上の力が発揮できるところでしょう。サッカーのよう

に地上でボールを追うのとは違い、氷上では1分間立っていることも難しいのです。そのような状態でも小さなパックを追ってコート内を激しく走り回るわけですから、ほかの競技にはないスピード感が一番の醍醐味となります。ゴールが決まった時の爽快感は、ほかでは味わうことができません。

そのアイスホッケーが観戦できる国内の主な大会は、毎年9月に行われる「関東大学リーグ」と「アジアリーグ（17日から、北海道、東京ほか）」で、特にアジアリーグは国内トップレベルのチームに、韓国、中国の2カ国が参戦してのリーグ戦となっています。

20,000の競技人口を支えていきたい

現在、日本アイスホッケー連盟には、北海道2チーム、栃木1チーム(市



民チーム)、青森1チームの計4チームが実業団チームとして所属しています。その下に各地方連盟や大学リーグなどがあります。競技人口は、幼稚園・小学校から社会人まで年齢層は幅広いのですが、日本アイスホッケー連盟登録で約2万人、非登録を含めて約2万2~3,000人と、数的にはまだまだです。

今後の課題としては、やはりアイスホッケーというすばらしい競技の普及と強化です。2年前に、これまであった連盟組織を再編成して新組織が発足しました。現在、県内の11チームほどが参加していますが、千葉県にも「アクアリンクちば」という聖地がありますから、本格的に県内のアイスホッケーの普及と強化に向けて活動し、裾野を広げていきたいと思っています。

今、注目しているのは高校生です。県内には現在、北海道のようにアイスホッケー部を持つ高校がありません。これから各校に呼びかけていきます。大学も千葉大学だけですが、まず高校から開拓していき、大学に広げたい。そして弊社は、身を削ってでも用具・用品を提供というカタチで支え、「底辺拡大に貢献できれば」と常日頃、想いを続けている次第です。



常務の米本明さんと。